

計	三	四	五	六	七	八	九	十	十
月	月	月	月	月	月	月	月	月	月
六三五	六三三	六三〇	六二七	六二四	六二一	六一八	六一五	六一二	六〇九
二六、九三	二六、八七	二六、八〇	二六、七四	二六、六八	二六、六二	二六、五六	二六、五〇	二六、四四	二六、三八
六六	六六	六六	六六	六六	六六	六六	六六	六六	六六
二、一三	二、一三	二、一三	二、一三	二、一三	二、一三	二、一三	二、一三	二、一三	二、一三

大正七、八年ノ流行期ニ相當スル前年ノ月次ニ於ケル死亡届出實數

死亡届出總數	一日ノ死亡届出數	肺炎 死	一日平均肺炎死者
大正六年 十月 五九一	一九、〇六	二五	〇、八
同 十一月 六四三	二一、四三	四二	一、四
同 十二月 八三五	二六、九三	一〇五	三、三
大正七年 一月 九二六	二九、八七	一九一	六、一
同 二月 六六八	二二、八五	九八	三、五
同 三月 六三五	二〇、八三	六六	二、一
計 四、二九八	二二、六一	五二七	二、八九

大正七八年流行期ノ死亡届出實數

死亡届出總數	一日平均死亡届出數	肺炎 死	一日平均肺炎死者
大正七年 十月 八〇六	二六、〇〇	一二二	三、九

死亡届出總數	一日平均死亡届出數	肺炎 死	一日平均肺炎死者
大正七年 十一月 九四五	三一、五〇	二九四	九、八
同 十二月 八三二	二六、八三	一三九	四、四
大正八年 一月 一〇七五	三四、六七	三四四	一一、二
同 二月 一一二六	四、二一	四六六	一六、六
同 三月 六九五	二二、四一	一二五	四、〇、三
計 五、四七九	三〇、一〇	一、四九〇	八、一、八

大正八、九年「後流行期」ニ於ケル死亡届出實數

死亡届出總數	一日平均死亡届出數	肺炎 死	一日平均肺炎死者
大正八年 十二月 七二八	二三、四八	一三九	四、四
同 一月 一、八〇四	五八、一九	一〇六三	三、四、二
同 二月 一一、一〇〇	三八、二七	四四五	一五、三
同 三月 七二九	二四、五一	一二八	四、一
計 四、三七一	三三、八二	一、七七五	一四、五

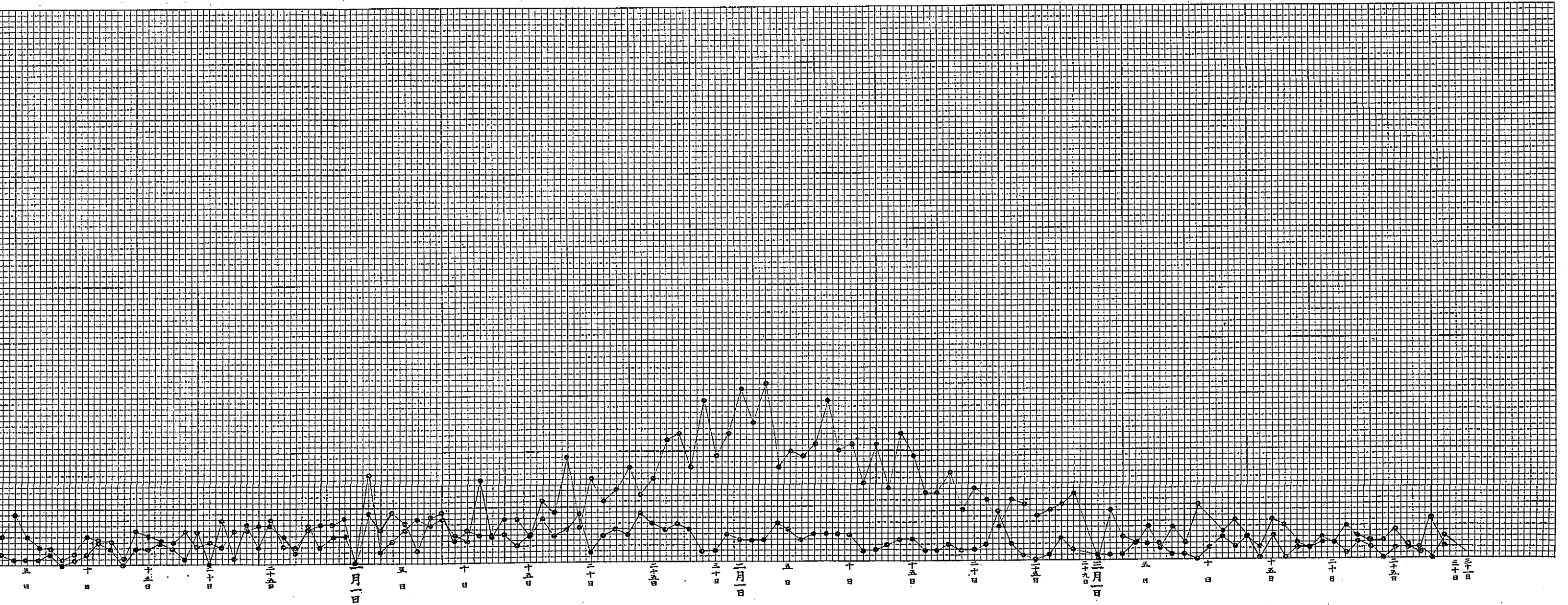
横濱市内ニ於ケル大正六年中ノ死亡届出總數ハ七千五百二十人ニシテ、一日平均二〇、六人ニ當リ内肺炎死亡數八百三人、一日平均二二人ヲ示セリ。

更ニ之ヲ縮少シテ大正七年十月ヨリ翌年三月ニ至ル流行期間ノ死亡數ヲ、流行ノ前年次ナル大正六年十月ヨリ七年三月ニ至ル死亡數ト對照スルニ、流行ノ前年次ニ於テハ冬期六ヶ月間ニ於ケル一日ノ死亡届出平均數ハ二三六一人ニシテ、内肺炎死二八九人ナルニ反シ、流行年次ニ於テ一日ノ死亡届出平均數三〇二人、内肺炎死ハ八八一人ニシテ、届出數ニ於テ六、四九人死亡ニ於テ五二九人ノ増加ヲ見タリ。此ノ増加數ハ即チ流行性感胃ニ併發或ハ續發セル流行性感胃肺炎

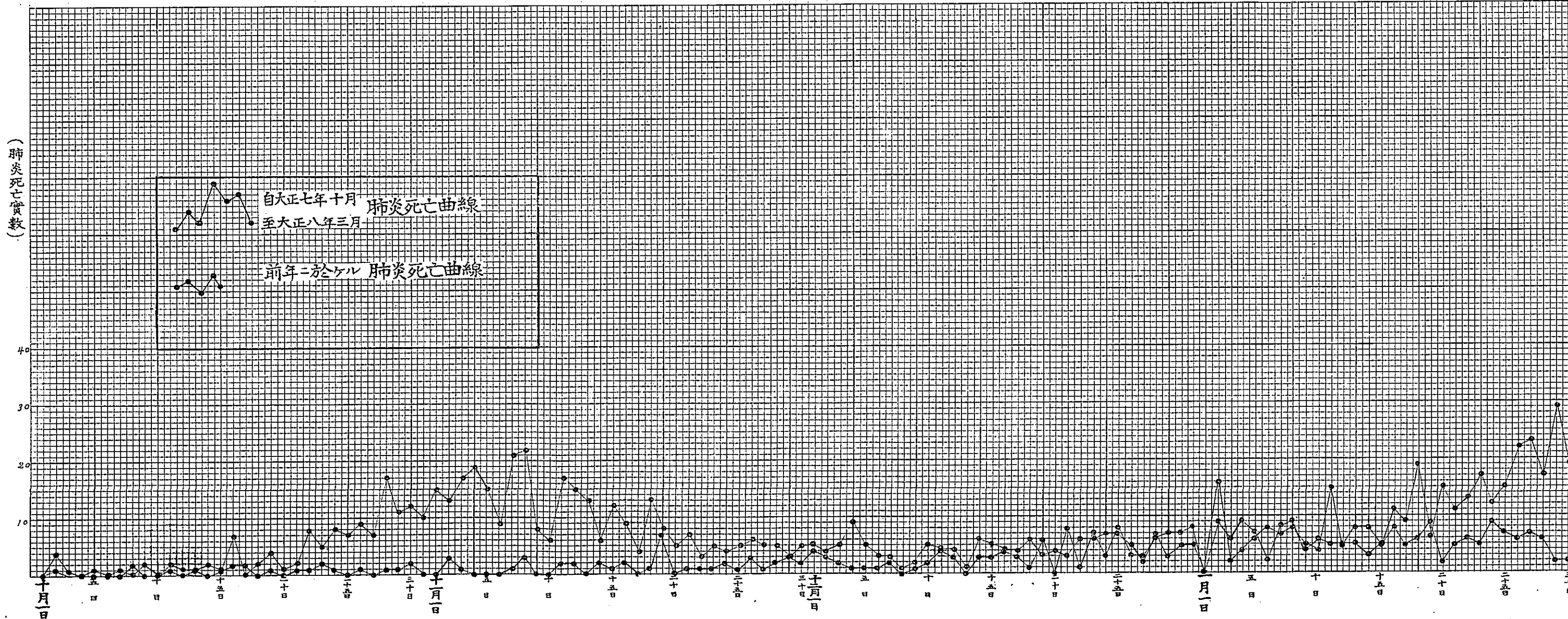
ノ死亡者ヲ意味スルモノトス。
大正八年ニ於ケル「後流行」ニ於テハ更ニ増加シテ届出數ニ於テ三五八人肺炎死亡一四五人ヲ示セリ。之レ「後流行」ニ於ケル續發性肺炎患者ノ増加ヲ意味スルモノニシテ七八年ノ流行ニ比シ病勢ノ惡化セルモノト見ルベシ。
今肺炎死亡増加ヲ曲線ヲ以テ示セバ左圖ノ如シ。

自大正七年十月
至大正八年三月

横濱市ニ於ケル肺炎死亡曲線表

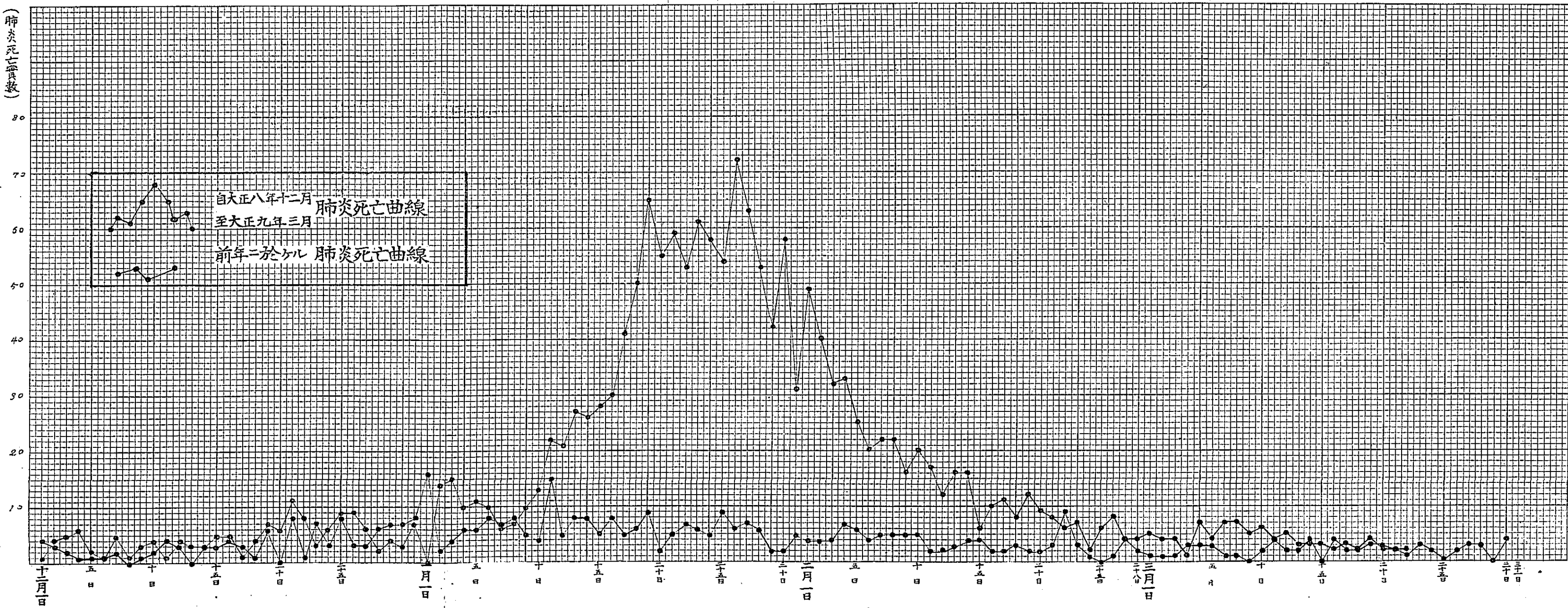


自大正七年十月 至大正八年三月 横濱市ニ於ケル肺炎死亡曲線表



自大正八年十二月
至大正九年三月
横濱市ニ於ケル肺炎死亡曲線表

(肺炎死亡總數)



右ノ肺炎死亡曲線ニヨリテ横濱市ニ於ケル肺炎死亡數ノ消長ヲ觀察スルニ大正七年十月十五日ニ至ルマデノ肺炎死亡届出數ハ大正六年ノソレト殆ンド一致シテ僅カニ一、二名ニ過ギザリキ。超ヘテ十六日ニ至リ突發的ニ七名ヲ出シタルモ、後チ數日間上昇ヲ見ル事ナク經過セリ、降テ二十三日ニハ八名トナリ、以後多少ノ動搖アルモ依然トシテ大正六年ニ比シテ著明ナル間隔ヲ保チテ十一月ニ入り、同月八日遂ニ二十二名ノ届出ヲ起點トシテ漸次減少ニ傾キ、十二月十一日ニ至リテ大正六年ノ肺炎死亡數ニ一致スルニ至ル。此ノ間十月十六日ヨリ約五十七日間ニ及ベリ。之ヨリ以後ハ前年ノ死亡數ニ平衡シテ一月ニ入ル。然ルニ、一月十六日ヨリ再び曲線ノ上昇ヲ示シ、二月三日ニハ秋期ノ流行時ニ於ケル最高頂點ヲ突破シ三十二名ノ肺炎死者ノ届出ヲ見ルニ至レリ。而シテ之ヨリ高低不同ナルモ漸次減少シテ三月二十日前後ニ及ンデ前年ノ肺炎死亡數ト一致スルニ至レリ。此ノ流行期間ハ一月十六日ヨリ五十八日間ニ亘レリ。

更ニ大正八、九年ニ於ケル所謂「後流行」ニ於テハ、大正八年十二月十九日頃ヨリ前年同期ノ肺炎死亡數ニ比シテ増加ヲ示シ、一月三、四日ニ至リ少シク増加シ後チ數日間稍々減少ヲ來シ、再び九日ヨリ遞次上昇シ一月十七日ニ至リ三十名ニ及ビシガ之ヨリ毎日十名ヲ増加シテ一月十八日ニハ六十五名ノ肺炎死者ヲ出シ、其ノ後數日間六十名内外ヲ動搖シテ一月二十六日ニ至リ遂ニ七十二名ノ肺炎死者ノ届出ヲ見ルニ至レリ。之レヲ「後流行期」ニ於ケル最高記録トナス。コレヨリ漸次減少ヲ見タリト雖モ、以後數日間四十名以上ヲ保チ二月十二日ニ至リテ漸ク十二名ニ減少シ、三月十三、四日頃ニ及ンデ前年ノ肺炎死亡數ニ合致シテ終熄状態ニ入レルモノニシテ、流行期間約六十餘日ニ及ベリ。斯ノ如ク一日ノ肺炎死亡數四十名ヨリ七十二名ヲ出ダシタル如キハ、横

濱市ノ統計記録ニ未ダ管テ見ザリシ所ニシテ、之ガ大部分ハ流行性感冒ニ因ル肺炎死亡ノ激増ニヨルモノトス。

是ニ由リテ流行性感冒流行ノ推移ヲ考察スルニ、最初流行性感冒ニ罹リ肺炎ヲ續發シテ死ノ轉歸ヲ取ルニ至ルマデノ時日ヲ七日乃至二週間トスレバ、横濱市ニ於ケル流行性感冒ノ初發ハ、肺炎死亡ノ増加ヲ出現セル十月十五日以前ニシテ、即チ十月五、六日頃ト推論シテ可ナルベシ。而シテ十月二十七日頃ヨリ十一月十四、五日ニ亘リ約二十日間ハ、大正七年ニ於ケル流行ノ猖獗期ナルヲ知ルベシ。其ノ後約三十日間ノ衰退期ヲ經テ、一月初旬ニ再燃セルモノニシテ、一月二十五、六日ヨリ二月十五、六日前後ニ至ル二十一、二日間ハ、再流行ニ於ケル高潮期ノ出現ト見ルベク、其ノ後約四週間餘ニシテ殆ンド終熄セルモノトス。

更ニ大正八、九年ニ於ケル所謂「後流行」ニ於テハ大正八年十二月二十日ヨリ散發シツ、アルヲ推定スベク、流行ノ最モ激甚ヲ極メタルハ一月十日前後頃ヨリ二月初メニ至ル約三週間トナス。而シテ二月十日前後ヨリ流行著シク衰退シ三月初旬ニ至リテ殆ンド終熄セルモノトス。

以上ノ肺炎死亡曲線ヲ根據トシテ二期三回ニ渡ル流行期間ヲ按ズルニ、都市全體トシテハ各流行共ニ約三週日餘ノ先驅期ヲ有シ、此ノ間ニ病毒全市ニ瀰蔓スルニ及ンデ流行ノ極期ニ達シ約三週日ノ猖獗期ヲ經過シテ衰退期ニ入り、約四週日ノ後殆ンド流行ヲ終ルモノノ如シ。即チ都市ニ於ケル一流行ハ先驅期ハ短クシテ急速ニ極期ニ達シ、終熄期ハ長クシテ、除々ニ經過スルモノナルコトヲ知ルベシ。然レドモ流行性感冒肺炎ニ因ル死亡者ハ、治療法其ノ他個體素質ニ絶大ナル關係ヲ有スルモノナルヲ以テ、肺炎死亡者ニヨル統計ハ素ヨリ流行轉機ノ説明ヲオスニ適

當ナルモノニアラザルハ論ナキ所ナルモ、都市死亡状態ノ一部トシテ之ヲ觀ル時ハ敢テ不可ナカルベキナリ。

次ニ二回三期ノ流行ヲ通ジテ流行性感冒肺炎死亡數ヲ比較スルニ、第一回流行ノ第一期(秋期)ニ於テハ十月十六日ヨリ十二月十一日マデ四百四十一名ノ肺炎死ヲ出シ一日ノ最高二十二名ヲ出デズ、第二期(春期)ニ及ンデ約倍加シテ八百八名(自二月十五日最高三十二名トナリ、更ニ大正九年春期ノ後流行)ニ於テハ著シク上昇シテ第二期ニ於ケル死亡數ノ二倍以上ヲ示シテ千五百八十八名(自十二月十一日)一日七十二名ノ最高記録ヲ示セリ。

是ニ由テ之ヲ觀レバ流行性感冒ハ初回ノ流行ヨリ次回三回ト經過スルニ隨ツテ、之レニ併發又ハ續發スル肺炎ノ増加ヲ惹起スルモノナルベク、從ツテ肺炎死亡ノ増強ヲ來スモノト云フベシ。

但シ茲ニ記載スル肺炎死亡ノ總數ハ平年ニ於テモ常時存在スル少數ノ肺炎死亡數ヲ扣除セザルヲ以テ純流行性感冒肺炎ノミニ非ザルモノトス。然レドモ曲線表ヲ對照スル時ハ自ら流行性感冒ニ因ル肺炎死亡ノ増加ヲ理解シ得ベキヲ信ズ。

第九章 豫防施設ノ概要

大正七年秋季ヨリ大正九年ニ亘ル流行性感冒ノ「パンデミー」ヲ防疫學上ヨリ觀察スルニ之ヲ三期ニ區別スル事ヲ得ベシ。即チ大正七年ニ於テハ專ラ病原研究ノ時代ニシテ免疫學的豫防法ヲ講ズルコトナク、極メテ不徹底ナル「ガーゼマスク」及ビ含嗽劑ノ使用、集會ノ制限等ノ消極的豫

防ノ時代ニシテ何等ノ系統的施設ノ見ルベキモノナク、徒ラニ病魔ノ跳梁ニ人命ヲ委ネタルノ状態ニ在リキ。然レドモ學者ノ研究空シカラズシテ種々ナル說ヲナスモノアリト雖モ要スルニ(一)バイフェル氏菌ヲ以テ病原トナスモノ(二)肺炎双球菌ニ原因の意義ヲ附スルモノトヲ其ノ代表の學說トス。斯ル間ニ流行性感胃ハ學界ノ論争ヲヨソニ觀テ流行ノ一時的衰退期ニ入レリ。

翌大正八年一月下旬流行ノ再燃スルヤ、學者ハ客年各々其ノ學術的信念ノモトニ決定セリト稱スル病原菌ヲ以テ種々ナル「ワクチン」ヲ製シ、之レヲ以テ合理的方法ナリトシテ豫防注射ヲ人體ニ應用セントセリ。即チ豫防注射ノ試驗的時期ニシテ將ニ感冒「ワクチン」使用ノ過渡時代ニ屬セリ。而シテ部分的使用ノ結果ハ「バ氏菌」「ワクチン」「肺炎菌」「ワクチン」及「バ氏菌肺炎菌混合」「ワクチン」ノ何レヲ問ハズ、學者ハ各自ノ使用セル「ワクチン」ニ就テ相當ノ效果ヲ統計ノ上ニ現ハシタリト稱スル間ニ流行ノ終熄ヲ見タリ。

大正八年末ヨリ大正九年ノ「後流行」ニ於テハ、學說上、或ハ統計上、具體的ニ確立セル「ワクチン」ヲ豫防注射ヲ一般人ニ應用セントスル即チ感冒「ワクチン」應用ノ時代ト見ルベキナリ。

斯ノ如クニシテ流行性感胃ノ豫防ニ關シテハ、衛生行政上ノ取締ノ方面ヨリ尙幾多ノ缺陷及研究事項ノ存スルモノアリトスルモ、又病原論ニ關シテ學說ノ一致ヲ見ザルモノアリトスルモ、人類ノ大多數ヲ侵襲シ短日月ニ流行ノ完結スルヲ特徴トスル流行病ノ豫防法トシテハ將ニ一段落ヲ劃スルモノト觀テ可ナルベシ。

之ヲ本縣ノ豫防施設ニ觀ルモ大體此ノ範ヲ出デザルベシ。
一、大正七年ニ於ケル對策

病原研究時代

消極的豫防時代

本縣ニ於テハ最初流行性感胃ノ蔓延ヲ防止セントシテ豫防心得ヲ全縣下ニ配布シテ夫々警戒セシメ、殊ニ「ガーゼマスク」ノ使用及鹽剝水、又ハ過酸化水素水等ノ合嗽ヲ獎勵スルト共ニ、衣類、寢具ノ日光消毒等ヲ獎勵セシメツ、アリタルモ、殆ンド何等ノ見ルベキ效果ナクシテ徒ニ罹病者ノ増加ヲ見ルノ有様ナリキ。

茲ニ於テカ人心ノ不安ト恐怖ノ念トヲ防ガントシ、豫防シ能ハズンバ治療ヲ以テ之ニ代ントシテ救護班ノ巡回診療ヲ計畫シ先ヅコレヲ細民部落ニ試ミタリ。

横濱市内ニ群居セル細民部落ハ四部落アリ、其ノ總戸數三千餘戸ニシテ、日用品、殊ニ食料品ノ騰貴ニ苦シメル折柄、病魔ノ來襲ニヨリ一層悲惨ナルモノアリトノ報類々タルヨリ、コレガ狀況ノ調査ヲ各警察署ニ命ジタルニ、別表示スガ如ク十一月七日現在ニ於ケル總戸數三千八十二戸、内患者百十八戸人員百五十六人ヲ算シ、尙新患者續發スルノ傾向顯著ナルヨリ、直チニ同部落ニ對スル救護診療班二組ヲ組織シ各班ニ醫師、藥劑師各一名及看護婦二名ヲ付シ醫療藥品其ノ他ノ材料ヲ携帶シ十一月八日ヨリ各戸ニ就キ訪問診療ニ從事セシメタリ。十二月中旬ニ至リ病勢衰退セシヲ以テ十二月二十八日ニ至リテ中止セリ。治療者ノ總數ハ別表ニ示ス如ク二千七百三十五戸、救護人員三千二百八十三人ニ及ベリ。本縣ニ於ケル此ノ診療救護實施ノ舉ヲ贊シテ、横濱市中村町一、三、四、三番地田邊亮君ハ、十一月十九日金五百圓ヲ提供シテ診療費ノ一部ニ資セラレタルハ縣民ト共ニ感謝措ク能ハザル所ナリ。

二、大正八年春季ニ於ケル對策

ワクチン試用時代

大正七年十二月ニ及ンデ病勢衰退セルガ如キ状態ナリシニ翌八年二月ニ入り病勢再燃シ、病狀不良性ヲ帶ビタルヨリ、二月七日救護班ノ組織ヲ再設シ、横濱市内細民部落ノ診療ヲ開始シ、銳意救護ニ努力シ、巡回戸數一千五百六十二戸、患者一千八百十一人ヲ治療シテ、三月五日流行ノ終熄ニ向ヒシヲ以テ之ガ組織ヲ解ケリ。

一面ニ於テ我ガ神奈川縣ハ流行性感胃ノ病原ナリト信ズルバイフェル氏菌ヲ以テ感作「ワクチン」ヲ創製シ、後章記載スルガ如キ論據ノモトニ實驗ヲ經テ之ヲ一般ニ應用スベク各方面ニ勸誘ヲ試ミタリ。時恰モ流行ノ極期ニ在リシヲ以テ公衆ハ論理的、積極的豫防法ノ案出ヲ醫學者ニ期待スル所切ナルモノアリ。本縣ニ於ケル感作「ワクチン」創製ノ報ヲ聞クヤ縣下ノ開業醫、汽船會社、學校、衛生組合、工場等ニ於テハ恰モ救世主ノ出現ノ如ク「ワクチン」ノ分與ヲ乞フモノ到殺シテ忽チ二萬二千餘人分ヲ使用シ盡シタリ。惟フニ流行性感胃豫防施設トシテ「ワクチン」ヲ應用セルハ蓋シ本縣ヲ以テ嚆矢トナス。而シテ本縣内ノミナラズ感作「ワクチン」ノ創製ヲ聞キ傳ヘテ愛媛、福島、山梨、山口、三重、北海道等ノ他府縣開業醫ヨリモ分與ヲ乞フモノ頻リナレバ、本縣ハ製造能力ノ及ブ限リ無償分與スル所アリタリ。

顧ミルニ本縣ハ大正五年「コレラ」病流行ニ際シテ、各府縣ニ率先シテ感作「コレラ」ワクチンヲ創製シ、之ヲ應用シテ其ノ効果ノ顯著ナリシハ當時醫學會ニ於テ既ニ承認シタル所、今又流行性感胃ノ大流行ニ際シ全國ニ拔ンデ、バ氏菌感作「ワクチン」ヲ縣民ニ使用シ相當ノ効果ヲ齎シテ全

國防疫當事者ニ範ヲ延レシハ、第四十一議會(大正八年三月)ニ於テ當時ノ衛生局長杉山四五郎氏ガ言明セル所ニシテ吾人衛生ノ衝ニアルモノ、衷心誇リトスル所ナリ。

三、大正八、九年ノ流行ニ對スル豫防策

バ氏菌感作「ワクチン」應用時代

流行性感胃ハ其ノ世界的流行ニ次デ、後流行ヲ來スハ疫學史ノ立證スル所ナリ。本縣ニ於テハ豫メ之ニ備ヘンガタメ本病豫防上心得ベキ事項ヲ一般ニ周知セシメンガ爲メ別紙注意書十萬枚ヲ印刷シ各郡市役所警察署ニ配布シ以テ公衆ノ自衛心ヲ喚起シ豫防注射ノ應用ヲ宣傳セリ。而シテ其ノ後患者ノ發生ヲ見ルニ及ビ前回ノ流行狀態ニ鑑ミ、患者ハ可成健康者トノ隔離ニ務メ病毒ノ散蔓ヲ防ガントシ、健康者ニハ「マスク」ノ使用、含嗽劑ノ常用ヲ勵行セシメタルモ之ガ徹底ヲ期スル事容易ナラザル虞アリ。大正八年二月以來應用シ其ノ効果ノ大ナルモノアルヲ認メ、而シテ其ノ論理的ニシテ、且ツ積極的豫防法タル「ワクチン」豫防注射ノ施行ヲ獎勵シ、之レガ需用ニ應ズル爲メ本縣第二衛生試驗場ニ於テバイフェル氏菌感作「ワクチン」ノ製造ニ着手シ、市町村ヲ指導シテ豫防注射ノ普及ニ努メ、又縣下ニ於ケル横須賀海軍工廠ヲ始メ各開業醫師、病院、學校、工場、會社及ビ横濱市内各汽船會社等ヨリ陸續トシテ申込殺到シ大正九年六月末日マデ三十七萬六千八百八十瓦ヲ配布シタリ。

第二衛生試驗場ハ火災後ノ假室ニテ裝作ノ困難ナル感作「ワクチン」ノ製造ニ殆ンド不眠不休ノ活動ヲ續ケ一手ニ全縣下ノ需用ニ應ジタルハ大ニ愉快トスル所ナリ。「ワクチン」ノ効力ニ就イテハ後章改メテ論ズル所アルベシ。

又「ワクチン」ノ應用ト相俟テ、他ノ一面ニ於テ大正七、八年ニ施行セル横濱市内ニ於ケル細民救護ヲ擴張シ、全縣下ノ醫療ヲ受クル能ハザル者ニ對シ之ガ救療ヲ目的トシテ縣下ヲ四部五班ニ別チ、横濱市ニ二班ヲ置キ、横濱市、橋樹郡、都筑郡、久良岐郡ヲ擔當區域トナシ、他ハ各々一班トシ別表ノ如ク部處ヲ定メテ防疫員、防疫監吏各一名ヲ付シ、醫藥品ヲ携帶シ、二月八日ヨリ巡回診療ニ從事シ、各班共ニ到ル處ニ歡迎セラレ相當ノ好果ヲ收メ、三月二十日流行ノ終熄ヲ見ルニ及ンデ之ガ組織ヲ解ケリ、此ノ間診療患者延人員實ニ九千四百十一名ノ多キニ達ス。

診療中悲惨ナル境遇ニ在リシ者ノ事例多々目撃セル所ナリ、今ソノ一、二例ヲ舉グレバ左記ノ如キモノアリ。

第一例

横濱市南太田町九五六

死亡 戸主 神 山 富 藏
 妻 マ ツ
 長女 ソ メ
 三女 ウ メ
 死亡 二男 安太郎

全戸罹病内二名死亡

右神山方ニテハ一月十八日戸主富藏流行性感胃ニ罹リ引續キ妻マツ、長女ソメ、三女ウメ、二男安太郎ノ全家五名罹病シ、廿六日午後ニ至リ戸主富藏翌廿七日午後二男安太郎ノ兩名途ニ死亡

シ三女ウメ、亦重體ニ陥リ二個ノ屍體ノ横ハル側ニ妻子三名ノ呻吟スル様言語ニ絶ユルモノアリ、廿七日夜救療班ニ於テ「ワクチン」注射ノ結果良好ナル經過ヲ取レリ。

第二例

横濱市中村町二六六

戸主 關 根 寅 吉
 妻 飯 村 フ サ
 長女 キ ネ
 長男 眞 雄

一家四名ノ内三名罹病

右寅吉方ハ長女キネ(十三年)ヲ除ク外三名共流行性感胃ニ罹リ完全ニ之ガ看護ヲ爲ス者ナク、且ツ無資産ニシテ療養ノ途ヲ有セザリシ者ニテ食料ノミハ雇ハレ先ヨリ前借シ僅カニ糊口ヲ凌ギ居レリ。

第三例

高座郡田名村陽原五六五三

戸主 小 菅 菊 松
 外家族 七名

一家八名ノ内三名死亡三名罹病中

右小菅菊松方ハ一戸八人中三名死亡シ目下戸主菊松ヲ初メ子供二名病床ニ在リ、妻ハ連日ノ

看護ニ身體衰へ、且ツ精神ニ異状ヲ呈シ健全ナルハ十八歳ノ男子一人ノミナリ。
第四例

都筑郡都田村川和一五〇三

戸主 服部 彌五郎

外家族四名

一家五名ノ内二名死亡二名罹病中

右服部方ハ一家五名ノ内四名共ニ感染シ内二名死亡シ二名ハ病床ニ在リ七十有餘ノ老母ノ
ミ健全ニテ僅カニ看護シツ、アリ

流行性感胃豫防心得

客歲猛威ヲ逞ウシタル悪性感胃ハ豫防撲滅ノ功ニヨリ終熄ノ期モ近キタリシガ昨今ニ至リ
其流行再燃シ加フルニ病毒モ更ニ悪性トナリ爲メニ不幸ナル死亡者モ亦増加ノ傾向ヲ示スノ
状態ナレバ各自左記ノ事項ヲ遵守シ之ガ災厄ヲ免ル、様セラルベシ

心得事項

- 一、住家ノ内外ヲ清潔ニシ日光ノ射入ヲ充分ナラシムル様留意スルコト
- 二、温暖ノ日ニハ可成的戸障子ヲ開放シ新鮮ナル空氣ト日光ヲ射入セシムルコト
- 三、室内ノ掃除ニハ塵拂ノ使用ヲ廢シ濕布ヲ以テ擦拭シ土間板間等ハ撒水ノ後掃除シ可成塵
芥ノ立タザル様注意スベキコト
- 四、殊ニ學校、寄宿舎、工場、旅人宿、貸席等ハ一層此注意ヲ緊要ナリトス

二、衣服類ハ清潔ニスルハ勿論晴天ノ時ハ寢具、衣服等ヲ日光ニ曝スベキコト

三、平素健康ナル者ト雖モ能ク攝生ニ注意シ健康保持ニ努ムルコト

殊ニ幼弱ナル者、高齢者及ビ呼吸器、心臟、腎臟等ニ疾病アル人ハ危険ナルヲ以テ注意ヲ怠ラ
ザルコト

四、咳嗽、噴嚏等ノ場合ニハ布片、紙片等ヲ以テ鼻口ヲ被ヒ唾液、鼻汁、痰等ノ泡沫ヲ周圍ニ飛散セ
シメザル様心掛グルコト

五、合嗽藥液ヲ用意シ外出歸宅ノ場合及ビ就床前ニ必ズ合嗽スルコト合嗽藥ハ硼酸水ハ硼酸

一匁ニ水一合又鹽剝水ハ鹽剝一匁ニ水一合ノ割ニテ作り又食鹽水ニテモ可ナリ其他ハ醫
師ノ指示ニ從フベシ

六、外出ノ時ハ可成呼吸器ヲ用ヒ又ハ口覆ヲ爲スベシ口覆ハ木綿切ノ中ニ青梅綿ヲ包ミ兩耳
ニ掛クル様ニ作ル可シ

七、患者並ニ咳嗽スル者ニハ接近セザルコト

患者アル家ニテハ訪問客ヲ病室ニ入レザルヲ可トス

八、頭痛、發熱、咳嗽其他身體ニ異状アルトキハ必ズ速ニ醫師ノ診療ヲ受ケ靜養スルコト

風邪ヲ輕視シ民間療法ヲ施シ或ハ賣藥等ニ委ネ外出シ又ハ勞働等ヲナストキハ肺炎ヲ起
ス恐アレバ殊更ニ注意スルコト

九、患者ハ可成日光射入ノ良好ナル別室ニ隔離シ看護人ノ外他人ヲ入ラシメザルコト

看護人ハ必ズ呼吸器ヲ懸クルコト

使用セシ呼吸器ハ時々煮沸消毒、或ハ藥物消毒ヲナスカ又ハ日光ニ乾カシ用ユベシ

一〇、患者ノ咳嗽噴嚏ノ時ニハ必ズ布片、紙片等ヲ以テ口鼻ヲ被ヒ痰唾、鼻汗等ノ飛散セザル様注意スルコト

一一、患者ノ咯痰鼻汗等ヲ拭ヒタル紙片ハ之ヲ焼却スルコト

一二、患者ノ使用セシ食器類ハ必ズ之ヲ別ニシ毎回熱湯ニテ洗フコト

一三、患者全治後ハ其病室ハ醫師ノ指示ニ從ヒ消毒スルコト

已ムヲ得ザル場合ニハ室ヲ開放シ日光ヲ射入シ尙ホ掃除ニハ濕布ニテ擦拭スルコト
衣類寝具等並ニ使用器具類ハ藥物ニテ消毒スルカ或ハ日光ニ數日間曝スコト
患者ノ唾壺又ハ不潔物ニ觸レタル手指ハ必ズ其都度消毒藥又ハ石鹼ニテ清洗スベシ

神奈川縣警察部衛生課

流行性感胃ニ罹ラヌ注意

一、豫防注射ヲスルコト

二、本縣製造ノ豫防注射液感作「ワクチン」ハ請求アルトキハ申込ノ順ニ依リ交付ス此ノ液ハ豫防ニモ治療ニモ使ヘル

三、呼吸保護器ヲ用フルコト

四、含嗽藥三十倍ノ鹽剝水、硼酸水又ハ食鹽水ニテ度々含嗽ヲスルコト

五、多衆集合スル所ニハ可成行カザルコト萬一罹ツタ時ニハ

一、速ニ醫師ノ治療ヲ受クルコト「ワクチン」ノ注射又ハ血清治療ヲスルトキハ死亡モ少ク治癒モ早イ

癩モ早イ

大正九年一月

神奈川縣

細民患者調査表 (大正七年十一月七日現在)

(×ハ死亡者數)

戸數	患家戸數	患者	救療ヲ要スヘキ人員
南太田町 庚耕地 五二〇	現既 在住 九二二	一七八	五
根岸町 相澤 八二五	現既 在住 一一一	二八六	二
中村町 八幡谷戸 一、四三一	現既 在住 三九〇	八五九	三
淺間町 三〇六	現既 在住 三七三	一、五三六	五
計	現既 在住 一六六六	一、四三七	一五

細民部落救護一覽表 (大正七年十一月ノ成績)

區別	八幡谷戸	相澤	庚耕地	淺間町	合計
十一月八日	六八	六八	五八	五八	二五二
同 九日	六八	六八	五八	五八	二五二
同 十日	六八	六八	五八	五八	二五二
同 十一日	六八	六八	五八	五八	二五二
同 十二日	六八	六八	五八	五八	二五二
豫防施設ノ概要	八九	八九	八九	八九	三五六

月日	區別	豫防施設ノ概要										
		八幡谷戸	相澤	一班計	庚耕地	淺間町	四戸部町	二班計	合計			
二月八日	同	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
二月九日	同	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
二月十日	同	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
二月十一日	同	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
二月十二日	同	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
二月十三日	同	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
二月十四日	同	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
二月十五日	同	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
二月十六日	同	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
二月十七日	同	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
二月十八日	同	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
二月十九日	同	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
二月二十日	同	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
二月二十一日	同	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
二月二十二日	同	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
二月二十三日	同	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
二月二十四日	同	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
二月二十五日	同	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
二月二十六日	同	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
合計		三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三

月日	區別	豫防施設ノ概要										
月日	區別	八幡谷戸	相澤	一班計	庚耕地	淺間町	四戸部町	二班計	合計			
二月二十七日	同	三	三	三	三	三	三	三	三			
二月二十八日	同	三	三	三	三	三	三	三	三			
三月一日	同	三	三	三	三	三	三	三	三			
三月二日	同	三	三	三	三	三	三	三	三			
三月三日	同	三	三	三	三	三	三	三	三			
三月四日	同	三	三	三	三	三	三	三	三			
三月五日	同	三	三	三	三	三	三	三	三			
三月六日	同	三	三	三	三	三	三	三	三			
三月七日	同	三	三	三	三	三	三	三	三			
三月八日	同	三	三	三	三	三	三	三	三			
三月九日	同	三	三	三	三	三	三	三	三			
三月十日	同	三	三	三	三	三	三	三	三			
三月十一日	同	三	三	三	三	三	三	三	三			
三月十二日	同	三	三	三	三	三	三	三	三			
三月十三日	同	三	三	三	三	三	三	三	三			
三月十四日	同	三	三	三	三	三	三	三	三			
三月十五日	同	三	三	三	三	三	三	三	三			
三月十六日	同	三	三	三	三	三	三	三	三			
三月十七日	同	三	三	三	三	三	三	三	三			
三月十八日	同	三	三	三	三	三	三	三	三			
三月十九日	同	三	三	三	三	三	三	三	三			
三月二十日	同	三	三	三	三	三	三	三	三			
合計		三	三	三	三	三	三	三	三			

大正九年流行性感胃救護班組織

部	別	班	別	區	域
第一	部(横濱)	第一	班	横濱市、橋樹郡	域
第二	部(横須賀)	第一	班	都筑郡、久良岐郡	
第三	部(藤沢)	第一	班	横須賀市、三浦郡、鎌倉郡	
第四	部(小田原)	第一	班	高座郡、愛甲郡、津久井郡、足柄上郡、足柄下郡、中郡	

(二班ハ醫師二名、防疫監吏一名ヲ以テ組織ス)
 流行性感胃救護班診療成績 (大正九年三月二十日集計)

第一	第二	第一	第二
部	班	班	班
自二月八日	自二月十四日	自三月廿日	自三月二十日
患者實數	現在患者數	診察患者延數	同
二五八名(死亡四名)	一七名	二〇三名	一四五名(死亡一名)
		〇名	五八一名

合 計	第 四 部		第 三 部	第 二 部	自 二 月 十 三 日 至 三 月 二 十 日	患 者 實 數 現 在 患 者 數 診 療 患 者 延 數
	大 磯、松 田 署 管 内	小 田 原 署 管 内				
同 同 同	自 二 月 十 三 日 至 三 月 十 一 日	自 二 月 十 二 日 至 三 月 二 十 日	同 同 同	同 同 同	同 同 同	七 一 名 六 名 九 〇 六 名
	一 六 名 一 名 八 一 名	二 〇 六 名(死 亡 九 名) 一 名 二 七 五 〇 名				
同 同 同	同 同 同	同 同 同	同 同 同	同 同 同	同 同 同	三 一 七 名(死 亡 三 名) 一 三 名 三、〇 九 〇 名
	一 〇、一 三 名(死 亡 一 七 名) 三 八 名 九、四 一 一 名	同 同 同				

第十章 病原問題

流行性感胃病原ノ研究ハ世界ノ醫學者ヲ擧テ之ニ從事セシメタル所ニシテ、文献ノ復雜浩濶ナル翻續ニ違ナク、又其ノ結論ニ至ツテハ殆ンド歸一セル成績ニ到達セザルモノノ如ク、今尙紛糾状態ニ在リト雖モ、事實ハ學界ノ歸趨ヲ自ラ支配シテ諸家ノバイフェル菌病原説ニ傾キツツアルハ察スルニ難カラズ。一八七六年ロベルトコツホ氏ガ、初メテ脾脱疽菌ノ培養ニ成功シテ以

來幾十種ノ病原微生物ノ發見ヲ見タレ共、インフルエンザ菌ノ如ク不可解ナル運命ニ遭遇セルモノハ少ナカルベシ。未決定ノ病原ハ依然トシテ未決定ナリ。一部學究ノ徒ノ誤信セル病原發見ノ業蹟ハ、幾何モナク研究ノ不備ト輕卒トヲ暴露シテ後學者ノ戒トナリ、空シク細菌學史上ニ葬ラレタルモノ亦其ノ類例ニ乏シカラズ。學説ノ盛衰覆滅ハ學術ノ常トスルモ、三十年前既ニ適確ニ學界ノ承認ヲ經タルモノニシテ、今日再ビ病原トシテ疑ハレタルモノハアラザルナリ。

顧レバ一八八九年ヨリ數年ニ亘ル「インフルエンザ」ノ世界的「パンデミー」ニ於テ、バイフェル氏ガ本病患者ノ鼻咽分泌、喀痰等ニ於ケル細菌學的検査及ビ其ノ病理解剖的所見ニ於テ一種ノ小桿菌ヲ無數ニ發見シ、之ヲ「インフルエンザ」ノ病原體トシテ報告(一八九二年)スルニ及ンデ、前年來ワイクセルバウム、エプスタイン氏等ハ自己ノ主張ニ係ル肺炎双球菌ニ因ル病原説ヲ翻ヘシ、其ノ他何レモバイフェル氏ノ發見ヲ是認シ、之ヲ以テ當時ニ於ケル「インフルエンザ」ノ原因トナシテ文献ヲ構成セリ。然ルニ其ノ後「インフルエンザ」小流行ニ於テハバイフェル氏菌ヲ發見スルコト漸次減少シ、反ツテ肺炎双球菌カタール性球菌等ヲ見ルコト多ク、又他ノ疾患ニ於テモバイフェル氏菌ヲ檢出スルモノアルニ至リテ、諸家ハ漸次バイフェル氏菌ノ病原性ニ關シ疑問ヲ抱クニ至レリ。例ヘバ一八九四年クルーゼハ臨床上「インフルエンザ」ト見做スベキ患者ニバ氏菌ヲ證明セザリシト謂ヒ、ジャクシハ一八九八年ヨリ一八九九年ニ於ケル流行ニ一ツノバイフェル氏菌ヲ見ザリシト稱シ、其ノ他バール氏ノ如キモ、地方的流行ニ於テ本菌ヲ見ルコト少シト記セリ。ペルナルド氏ハ一九〇五年流行性感胃ノ原因トシテ、肺炎双球菌ヲ擧ゲ、其ノ他連鎖狀菌、インフルエンザ菌及ビ不明ノ病原體等ノ之ニ關興スルモノナルコトヲ記載シ、グルシユマンハ四十九例

中殆ンド凡テニ於テ肺炎双球菌ヲ證明シ、ルツアトウ氏ハ十例ニ於テ肺炎菌ヲ檢出シ、其ノ他ル
「エマン」氏ノ如キモ之レニ一致スル成績ヲ擧ゲタリ。本邦ニ於テモ北里研究所高野博士ハ田中
氏ト共ニ、大正五年ノ感冒流行ニ際シテバイフェル氏菌ヲ檢出スルコトナク、肺炎双球菌ヲ證明
シ、之ヲ以テ當時ニ於ケル感冒ノ原因トナセリ。其他シエーレー氏、ゴルトン氏等ハ「インフルエン
ザ」ノ「カタル」性球菌ニヨリテ起ルコトヲ主張シ、ゼーリヒマンノ如キハ連鎖狀球菌モ亦コレガ
原因タリ得ルコトヲ斷言セリ。他面ニ於テ麻疹、猩紅熱、結核、デフテリイ等ノ患者ニ於テモバイフ
エル氏菌ヲ發見スルニ及ンデ、諸學者ノ「インフルエンザ」ニ對スル病原の見解ハ遂ニ二様ニ岐ル
ルニ至レリ。阪チ短日月ノ間ニ世界的流行ヲ惹起スル「インフルエンザ」ハバイフェル氏菌ニ原因
シ、限局的地方的流行ニ止マルモノハ、肺炎双球菌「カタル」性菌及ビ其ノ他ノ菌ニヨリテ起ルモ
ノニシテ、各々其ノ病原菌ヲ異ニスルモノトナセリ。是レ今回ノ世界的流行以前ニ於ケル學界一
般ノ見解ナリキ。

繼ツテ今回ノ流行狀態ヲ見ルニ前章詳述スルガ如クニシテ、之ヲ疫學的方面ヨリ觀察シ、又諸
家ノ臨床ノ報告ヲ参照スルニ、將ニ一八八九—一八九〇年ニ於ケル「インフルエンザ」バンデミ
「ニ」勢弱タリ、果シテ然ラバ今回ニ於ケル「インフルエンザ」ノ病原ハ何ゾヤ。又「インフルエンザ」ニ
元論ノ當否ハ如何。是レ歸セズシテ學者ノ視瞻ヲ集メタル問題ニシテ、學界ニ於ケル興味ノ中心
タリシナリ。

茲ニ於テカ今回ノ流行ニ於テ、歐米諸國ノ研究者ハ先入主の見解ノ下ニバイフェル氏菌ヲ檢
出シ得ント努力セシモ、何レモ満足ナル結果ヲ見ルコトナクシテ結論ヲ斷定シ得ズ、何等カノ條

件ヲ附シテバイフェル氏菌ナラントノ見解ヲ持スルモノ多ク、或ハ依然トシテ肺炎双球菌病原
説ヲ主張スルモノ、又濾過性病原説ニ隱レントスルモノ等、學說ノ一致ヲ見ルコトナク三十年以
前ノ歴史的記録ノ懷古ニ過ギザルガ如キ奇觀ヲ呈セリ。然レドモ之レ流行期ノ初期ニ於ケル見
解タルノ觀アリ。其後、流行ノ極期トナリ、或ハ終末期ニ入り技術ノ熟練ト共ニバイフェル氏菌ノ檢出數ヲ
増加シ、之ヲ以テ大流行ノ原因トナスニ躊躇スルモノ漸次減少シタル所ナリトス。即チ獨逸ニ於
ケル初期ノ報告ヲ見ルモ、グルーベル、フリードマン、コルレ等ハ何レモバイフェル氏菌ヲ見ズト稱シ、バイ
フェル氏ハ見ルコトアリ、見ザルコトアリテ尙研究中ト謂ヒ、ウーレンフウトモ同説ヲ持シ、殊ニ
コルレ氏ノ如キハ「グラム」陽性双球菌ノ肺炎菌ト共ニ無數ニ存在スルヲ見ルモ病原ナルヤ否ヤ
不明ナリ、或ハ一八八九年ニ於ケルト全ク別種ノモノニ非ザルカト記載セラレタルヲ引用シテ、
本邦ニ於ケルバイフェル氏菌病原決定早尙論者及反對論者ヲ喜バジハタル所ナリ。然ルニ其ノ後ノ報告
者ハ何レモバイフェル氏菌説ヲ發表セルガ如シ。一九一八年大正七年十二月十九日ノ獨逸醫事週報ニ於
テフロンム氏ハ「レヴンタール」血色素寒天ヲ以テバイフェル氏菌ヲ比較的多ク檢出シ、バイフェル氏菌ノ繁殖ハ次
デ來ル第二次感染ニ依リテ壓迫セラレ、末期ニ至レバ檢出困難ナル故ニ之ヲ證明セントセバ疾
病ノ初期ニ於テ反復検査ノ要アルヲ注意シ、又凝集反應ハ患者血清ニ對シテ屢々陽性ニシテ時
ニ診斷ニ資スルコトヲ得ベキ等ノ點ヨリ觀テ、今回ノ「インフルエンザ」ノ原因ヲバイフェル氏菌
ニ歸スルノ至當ナルヲ報告シ、プレスラウ大學ブローノ、ライヒテントリツト氏ハ「インフルエン
ザ」患者二十三例中死亡セル者ノ肺臟ヨリ、六〇%、脾臟ヨリ一七四%ニ於テバイフェル氏菌ヲ檢出シ、又殆
ンド純粹培養ヲ得タルモノアリ。此ノ所見ハバイフェル氏ノ學說ニ對シテ新ニ病原菌タルノ根

據ヲ加ヘタルモノナリト論ゼリ。

其他デユバル、ハリス氏等ハ肺炎ノ肺組織ヨリ九四%ノ高率ニバ氏菌ヲ證明シ且ツ患者ノ經過中及ビ回復期ノ或ル期間ニバ氏菌ニ對スル免疫物質ヲ含有スルモ、罹患セザルモノハ該物質ヲ有セザル等ノ事實ヲ擧ゲテ「インフルエンザ」ノ第一次性原因ヲバイフェル氏菌ニ歸セリ。

翻ツテ本邦ニ於ケル各研究家ノ發表成績ヲ檢スルニ、北里研究所ノ大河原氏等ハ、大正七年十一月十六日鼻腔液、喀痰ノ細菌學的檢査ト免疫反應ノ實驗ニヨリテ本病ノ原因ヲバイフェル氏菌ナリト斷言シテ「ルーマン、テデスコ、シエルレル氏等ノ稱フル如ク、世界的流行型ニ於ケル」インエンザ菌ノ病原的意義ヲ承認シテ、本邦ニ於ケル病原發表ノ先驅ヲナセリ。之ニ續イテ十一月二十日京都大阪兩醫學會ニ於テ病原發表アリ。京都大學豊島、關兩氏ハ双球菌ト共ニ「グラム陰性ノ小桿菌ヲ檢出シテ、病原ヲ兩者ノ混合傳染乃至第二次感染ト認ムベキモノナリトセリ。但シ「小桿菌ハ培養上ノ性質ニ於テ普通寒天ニ發育スルヲ以テバイフェル氏ノ「インフルエンザ」菌トハ一致セザルモノトス」ト記セリ。

之ニ反シテ、後藤清一氏ハ九一%ニバ氏菌ヲ檢出シテ流行性感冒ノ原因ニ擬シ、京都醫專常岡博士等ハ最初ノ實驗ニ於テ、バ氏菌ノ病原的意義ニ動搖ヲ來シタルモ、喰菌現象ヲ見ルニ及ンデ原因的關係ヲ有スト論ゼリ。大阪佐多博士ハ病理學的研究ニ依リテ、今次ノ流行性感冒及ビ其ノ肺炎ハ出血性細胞性浸潤ヲ特徴トスルヲ以テ、一八八九年—一八九〇年當時ニ於ケル諸家ノ記載ノ膿性浸潤ヲ主徵トスルニ一致セザルヲ立證シ其ノ原因ハ今尙ホ不明ノ一新病原體ナルカ、或ハ肺炎双球菌ノ一變種ナリト認ムベシト稱シ、更ニ感冒患者ニ二五、五%ニ檢出セルバイフェ

ル氏菌ノ意義ヲ論ジテ同菌ハ汎ク健康人ノ呼吸器粘膜ニ擴布セル上皮寄生菌ニシテ、他ノ原因ニ依ル粘膜ノ傷害ニ乘ジテ繁殖シ屢々病原性ヲ發揮スルニ至ルモノナルベク、又健康人ノ呼吸器及「インフルエンザ」以外ノ他ノ呼吸器ノ疾患ニ於ケルバ氏菌ノ培養成績ニ依リテ、更ニ大ニ闡明セラル。處アルベシト主張セリ。同年十一月二十四日傳染病研究所ノ石原博士一派ハ六八%ニ於テ、バ氏菌ヲ證明シタレドモ、免疫學的試驗陰性ナルヲ以テ病原ナリト斷言スルコト能ハズト報告シ、東大川北氏及山極博士等ハ八例ノ病理解剖所見ヨリ發病初期屍體ニ於テ、肺組織ヨリバイフェル氏菌ヲ見、グラム陽性双球菌ハ凡テノ例ニ於テ而カモ混合肺炎ニ最も多ク見ラレタル、又後者ハ普通見ラル、菌ニシテ「インフルエンザ」ナル特種傳染病ニハ、又一種特別ノ菌ガ原因ナルベシトノ考ヨリスレバ「グラム陽性菌」ハ大流行ノ發病體トシテハ疑ハシク、恐ラク一八八九—一八九〇年ノ大流行ノ時ト同ジクバイフェル氏菌ガ病原體ナルベシト思考スト記セリ。然レドモ、最後ニバイフェル氏ノ所說ト一致セザル點ハ、鼻腔腔粘膜ヨリバ氏菌ヲ容易ニ得タルコト、及肺病變ノ初期ニ於テ、出血性カタル「性肺炎」ニシテ膿性ニ非ラズ、又末期ノ混合傳染ニテハ、バ氏菌ヲ見ズシテ双球菌ヲ見タルコトナリ。コレ時勢ノ變遷ニシテ、大流行ノ時代ノ異ナルタメノ差異ナルカ、或ハ他ニ理由ノ存在スルカハ尙將來ノ研究ヲ要スルモノト附言シテ斷定的決定ヲ避ケタリ。

其ノ他、バ氏菌病原說ニ贊セルハ、東北大學ノ中村、大平ノ二氏、九州大學金子廉次郎氏等ナリトス。然レドモ中村氏ハ之ヲ斷定スルニハ動物試驗並ニ免疫反應試驗ノ餘リニ不十分ナルヲ遺憾トスト附記シ、金子氏等ハ免疫學的方面ヨリ觀察スレバ、余等ノ成績ハ勿論、他ノ諸家ノ成績ト雖

見解ヲ以テセバ一致セザルモノ、文献ノミヲ記載シ、一致セル文献ヲ記載セザルノ恨ナシトセズ。殊ニクスコー氏ノ如キハ、一八八九—一八九〇年ニ於テ「インフルエンザ」肺炎ヲ記載シテ、出血性及化膿性ノ二種アリトナスニ於テハ、當時ノ流行ニモ出血性肺炎ノ存在ヲ推定スルニ難ラズ。一面山極博士ハ「バイフェル」等ノ如キ細菌學者以外ノ學者ノ報告ハ、何レモ符節ヲ合スルガ如ク一致スト稱スルニ於テハ、益々今回「インフルエンザ」肺炎ト、先年ノ夫レトノ間ニ明カニ區別シ得ベキ差異ナキモノ、如シ。只問題ハ「バイフェル」氏並ニ二三ノ細菌學者ノ記載ニ對スル不一致ナリトス。是レ「インフルエンザ」肺炎病理解剖上ニ於ケル疑問ノ一ナリ。蓋シ佐多博士ヲシテ「バイフェル」氏菌ノ病原的意義ニ關スル疑問ヲ起サシメ、遂ニ之ヲ否定セシメタル第一條件ナルベシ。次ニ石原金子、中村氏等ハ他種傳染病ニ於テ、適確ニ證明セラル、免疫反應試驗ノ不確實ナルニヨリ、病原決定ニ對シテ躊躇シ、或ハ原因ヲ「バイフェル」氏菌ナリトスルヲ至當トスト稱シツツ之ガ斷定ヲ保留セシメタル所ニシテ、現時ニ於ケル血清免疫學說ニ相反スルヲ恐レタルガ如シ。是レ「バイフェル」氏菌ノ病原的意義ニ對スル疑問ノ第二ナルベシ。

更ニ地方性限局性流行感冒ニ於ケル文献ハ、肺炎双球菌ガ之ノ原因タリ得ルコトニ鑑ミ豊田島田兩氏ハ日本及ビ滿洲ニ於テハ「バイフェル」菌ニ重キヲ置クモ、肺炎双球菌ソノ他ニ原因スル感冒流行地ニ「バイフェル」菌ノ侵入スルアラバ、主因トシテ肺炎菌性感冒ノ流行ヲ見タル所アルベシト謂ヘルニ非ザルナキカ。之レ「バイフェル」氏等ノ文献ニ於テ、一〇〇%ニ檢出セラレタル「バイフェル」氏菌ヲ、今回ノ流行ニ満足ナル程度ニ證明シ得ザリシ疑問ニ對スル當然ノ結論ナリ。是レ文献ニ對スル疑問ノ三ナルベシ。

我ガ第二衛生試驗場ニ於テハ、大正七年十月下旬ニ於ケル流行ノ初期ヨリ病原研究ニ從事シタル結果左ノ結論ヲ得タリ。

- (一) 八十度三十分加熱血液寒天ニ發病初期ニ於ケル喀痰鼻咽腔分泌液ヲ培養スルコトニヨリテ「バイフェル」氏「インフルエンザ」菌ヲ八一・八%ニ檢出シ得タリ。
- (二) 快復期患者ノ血清ハ「バイフェル」氏菌ニ對シテ微弱ナルモ免疫反應ヲ呈ス。
- (三) 「バイフェル」氏菌ノ動物試驗(家兔)ニ於テ出血性肺炎ヲ惹起シ得タリ。
- (四) 本病患者ノ循環血液中ノ白血球減少症ハ「バイフェル」氏菌「ワクチン」ノ人體接種ニヨリテ殆ド同一ナル曲線ヲ描キテ減少スルヲ確認シタリ。
- (五) 「バイフェル」氏菌馬免疫血清ヲ流行性感冒患者ニ應用シテ自覺的他覺的ノ諸症ヲ緩解シ治療ノ奏効極メテ顯著ナル事ヲ實驗シタリ。

蓋シ「バイフェル」氏「インフルエンザ」菌ノ檢出ハ、比較的容易ナルモノニアラズ。本菌ノミナラズ、一般ニ既知病原微生物ノ檢出ニ於テモ、疾病經過ノ適當ナル時期ヲ必要トスルハ、言フ俟タザレドモ、殊ニ本菌ニ於テ然ルガ如シ。ワツセルマン及クレメンズハ「インフルエンザ」菌ハ流行時ニ於テモ、二十四時間乃至四十八時間後ニハ既ニ見出し得ザル事多シト謂ヘバ、個々ノ患者ヨリ細菌學的ニ檢出シ得ル事ハ、困難ナルモノアルベキナリ。況ンヤ余等ノ實驗ニ於テハ、肺炎菌ノ増殖ノタメニ著シク壓倒セラル、ノ事實アルニ於テ殊ニ然リトス。

次ニ、流行性感冒恢復期ニ於ケル患者血清ノ免疫反應ノ微弱ナルヲ以テ病原決定ノ論據トシテ不充分ナリトナサレシモ、余等ハ寧ろ本菌ノ如ク粘膜炎ニ寄生シテ、炎症ヲ惹起スルモノニ